

ムンダ民族誌ノート(1)—序説

長田 俊樹

I 序

0

インド共和国にパキスタン・バングラデシュ・ネパールをくわえたインド亜大陸は、旧ソ連を除くヨーロッパ大陸とほぼ等しい面積をもち、民族構成もまた多種多様である。インド共和国在住の諸民族のうちチョターナグプル地方に住むムンダ人は、もっとも古い時代に亜大陸に居住を始めた少数民族であり、近代においてはインドの独立闘争に大きな役割を果たした民族としてよく知られている。

筆者は1984年7月から1990年10月までインド共和国ビハール州ラーンチー市に滞在し、ムンダ人の言語研究を行う機会を得た。その際、言語だけでなくムンダ人独自の通過儀礼や年中行事等に参加することも多かった。そこで、ムンダ人の詳細な民族誌を記述できればと考えたしだいである。

しかし、ただやみくもに民族誌を書くのは、「一般理論の軽視」(山折1992:269)であるから、筆者なりの民族誌記述の枠組みを提示したい。

まず、言語学の立場を堅持した民族誌の記述をめざしたい。つまり、従来の構造主義的な浄/不浄といった人類学のモデルを想定したり、大伝統と小伝統といった概念を検証するといった立場から民族誌を記述することはしない。ムンダ語の語彙研究を出発点として、語彙の総体として現れてくる民族文化を記述していきたい。

こうした実証的な研究を踏まえたうえで、インドの少数民族を考察する際の問題点について論じていきたい。問題点としては、以下の三点があげられる。

- (1)インドにおける部族“Tribe”の概念。
- (2)M. N. Srinivasの提唱したサンスクリット化(Sanskritization)の検証。
- (3)「規範指向型社会」対「自然指向型社会」(Norm-oriented Society vs Nature-oriented Society)のモデルの提唱。

とくに、(3)において筆者が提示するモデルは、東南アジアや他の地域において、開発に伴う異文化との接触によって生じる文化摩擦の考察にも応用できる可能性をふくんでいると思われる。

この序では、言語学の立場からの民族誌記述の方法論について論じ、以下、上記三点の問題点の考察を順次行っていきたい。

1

語彙研究を原点に据えた民族誌の記述という方法は、過去になかったわけではない。かつて柳田國男がとった方法論が、その顕著な例といえる。それは柳田民俗学の集大成が『綜合日本民俗語彙』(全5巻昭和30-31年刊)であることに象徴的に表れているが、柳田自身もその著『郷土生活の研究』のなかでこう述べている。

一つ一つの印象を具体化する手段としては、言葉によるのほかはない。しかし言葉によって比較するためには、言葉を正確にし、しかも共通なものとする、即ちその言葉の意味をはっきりさせなくてはならない。(筑摩叢書版 p.216)

筆者の目指す民族誌も、柳田國男がこのように説明した分類語彙にほかならない。

しかし、言語学の立場からの考察といっても、実は「言語学」という言葉そのものを「正確に」把握しつつ論を進めなければならないだろう。言語学といえば、一般にはある言語の文法に通曉し、文法の「規範」を示す学問と考えられているようだ。事実19世紀までの言語学はその通りであったのだが、今世紀における言語学はこうした「規範主義」は退けられ、言語がどうあるべきかではなく、言語が実際にどうあるのかが問題にされるようになった。つまり、客観的観察に基づく言語の記述を目指すのが、現代言語学なのである。こうしたいわば主「記述義」⁽³⁾ともいうべき立場から、分類語彙を論じたい。

さらに付けくわえるならば、現代言語学の一方の流れである生成文法については、論及を避けたい。「初めに文法モデルありき」ともいうべき生成文法の立場は、個別言語データから一般理論を導くには有効であっても、あまり研究の進んでいないムンダ語のような個別言語の研究にはむかないからである。たしかに、チョムスキーの言語理論は普遍文法を視野にいられているので、ムンダ語の例が生成文法が一番新しい言語理論に合致する、あるいは合致しないと研究も成り立つはずである。しかし、ムンダ語のデータ記述が不完全な現状では、そうした研究がどれほどの意味を持つのか疑問である。今の時点では、できるだけ広範囲のムンダ語の記述こそが肝要といえよう。

本論を進めるにあたって、言語学のテクニカルタームを使用する場合は、そのつど説明をくわえたい。

2

稲作を主体とするムンダ文化は、日本古来の民俗と重なる部分が多い。したがって、ムンダ文化の考察は、言語学による民族誌記述に適しているということもさることながら、両文化の相似が方法論を支える側面も否定できない。

たとえば、ムンダ語では食事全般を指す言葉として *mandi* を用いるが、この *mandi* は《米の飯》つまり《米を炊いたご飯》を指し、utu《おかず》と対比する《主食》の意味をも

つ。すなわちこれは日本語の「ゴハン」と同じ構造をもつ言葉といえる。⁽⁴⁾さらに述べれば、mandi は gagae mandi (粟飯) など米以外にも使用されるので、《穀物を炊いてできたもの》というのが、狭義の意味である。「ゴハン」は食事全般を指すとともに、「オカズ」と対比する《主食》の意味を持ち、もっとも普通には《米の飯》を指し、「ムギゴハン」という複合語を考えると、《穀物を炊いてできたもの》という狭義の意味を持つ。また、英語では「rice」の一語でかたづけられる「イネ、コメ、ゴハン」にそれぞれ対応する baba, cauli, mandi がある。ムンダ語に隣接するインド・アーリア語では、こうした区別ははっきりとは見られない。⁽⁵⁾

ムンダ人がいつ頃から稲作を行っていたのかよくわかっていないが、きわめて古い時期に遡れることを言語学から論証した研究があるので、紹介しておきたい。Zide & Zide (1972, 1976) はムンダ諸語の農耕に関する語彙を比較し語彙の多くは借用語ではなく、ムンダ祖語に遡れることを言語学の比較方法に則って証明した。歴史的にみると、ムンダ祖語の時代とは Zide & Zide (1972: 1) によれば3500年前であるという。すなわちムンダ人の祖先は3500年前には農耕を行っていたことになる。現在、ムンダ諸語の話し手のなかには、ビルホル人⁽⁶⁾のように狩猟採集生活を行っている人々もいるが、彼らの祖先も農耕を行っていたというのが、Zide & Zide 説の要旨である。

このように、分類語彙の収集は言語研究の根幹を成すわけであるが、一方、人類学においても民俗分類 (folk taxonomy) という研究分野がある。⁽⁷⁾ある土地に住む人々が動物や植物をどう分類しているか、言語データを採集して研究するのである。筆者も分類語彙採集にあたっては、言語学でいう基礎語彙⁽⁸⁾とともに、民俗分類の方法論をも念頭に置きながら進めていきたい。

ともかく、言語学であれ人類学であれ、「言葉の意味をはっきりさせる」研究法には、「初めに理論ありき」といった研究にはない利点がある。誤った理論は歴史の批判に耐えられないが、生の言語データは理論を超えて使用に耐えうるからである。たとえば、ムンダ語の記述についても、1903年に出版された Mundari Grammar (MG) や1920年代に着手し、1978年⁽⁹⁾にようやく全十六巻が出版された Encyclopaedia Mundarica (EM) には、今の言語学の知識から見ると間違った記載がいくつかあるが、生の語彙データの価値は一向にかわらない。こうしたデータの供給も本論の目的のひとつである。

ところで、言語学の初歩で「言語の余剰性」という言語の特性のひとつを学ぶ。たとえば書かれた英語において、u- という文字は、q- に後続するときにはいくつかの借用語と固有名詞をのぞくと、完全に予測可能である。つまり、queen, question などでも u- を省略しても、いかなる情報も失われない。言語学では、これを「q- に後続する場合 u- は余剰的である。」というのであるが、言語データの採集においても余剰的なデータが言語知識の総量を大きく左右することが間々ある。たとえば、雨+傘という複合語を [アメカサ] といわ

ず「アマガサ」というのは、日本語を母語とするものなら誰でも知っている。一方、鯨+肌は「サマハダ」ではなく「サメハダ」である。しかし、こうした例外的な同化現象も、母語人口が減っていけば、例外を間違いとして「アメカサ」に統一されることもありうると、青木晴夫(1980)はアメリカインディアンのことばであるネズパース語の例を引きながら紹介している。つまり、規則にあてはまらない例外的なデータこそが、生きた言語の証であるというパラドックスも成り立ちえるのである。

3

つぎに、ムンダ人を含むインドの少数民族を対象にした民族誌記述における問題点、および民族誌記述の理由とその意義について論じたい。

問題点のひとつは、外国人による研究の減少があげられる。というのは、とくに1970年以降、外国人とりわけ人類学者が少数民族調査のために取得すべきヴィザがおりないので、事実上調査が不可能な事態になっているからである。とくに少数民族の多いアッサムなどは、中印紛争の係争地域となり、軍事的な意味からも外国人の入域は困難となっている。

一方、インド人による少数民族調査については、はじめから行政的な観点からの調査であって、少なくとも一年以上は現地に滞在して参与観察(participant observation)を行うといったフィールド調査の初歩的な原則さえほとんど守られていない現状である。また、少数民族の言葉ではなく、バザールで使用される地方共通語での調査が通例となっている。筆者は1978年に北海道大学探検部の一員として、こうした行政サイドの人類学調査をつぶさに観察する機会を得たが、以後インド人による民族誌にかなりの疑念をもつにいたった。こういった類の研究を除けば、1980年以降インド少数民族の民族誌は、ほとんど見られない。ムンダ民族誌についても同様である。⁽¹⁰⁾しかればこそ、ムンダ民族誌を記述する意義があるわけである。

ところで、過去においては、ムンダ人に関する民族誌は、質・量ともに豊富である。すなわち、現時点の共時的な調査をすれば、通時的な考察や地域差の研究も可能となる。過去の研究としては、S. C. Roy (1912) や1930年-1978年にかけて出版された Hoffmann 編集の EM、1960年代に調査した日本人研究者たちによる Sugiyama (1969) や山田隆治の博士論文(1969)をはじめとする一連の論文等があげられる。このような民族誌との比較による「内的考察」(山田1969:6)を通していえることは、ムンダ文化が大きな地域差をもっているということである。この点については、本論では順次明らかにしていきたいと考えているが、いずれにしてもこうした通時的・地域的研究が可能な少数民族はインドにおいてはまれであって、これが民族誌記述の二番目の理由ないし意義である。

記述の理由の最後に、ムンダ人を含めたインド少数民族に関する情報が誤っていたり、混乱を極めていたりする現状を少しでも改めたいという意図をあげておきたい。たとえば、弘文堂刊行の『文化人類学事典』は「オラオン族」の言語を「ムンダ」としているが、これは

「ドラヴィダ語族」の誤りである。また、最近出版された『世界の少数民族を知る事典』（明石書店刊行）のなかの88-90頁にインドの指定部族として「アディヴァシ」という項目があるが、ジャルクハンドとカタカナ表記しているのは、Jharkhand（ジャールカンド）の間違いである。今、チョターナーグプル地方では、ジャールカンド州設立の要求運動が展開されており、インドの記事がとても少ない日本の新聞（1992年9月19日付朝日新聞）の外交面のトップ記事を飾るほど注目されており、簡単には見過ごせない誤りであるように思う。事典のような基本図書にこうした誤りがすぐ見つかる状況は大変残念である。

こうした誤りは、もともになる文献自体に問題がある場合が多く、それをむやみに引用することから起こるようだ。とくに、サンタル語やムンダ語などの現地語の単語を引用する際に、もとの文献のローマ字表記に問題があるうえに、それをカタカナ表記に写すとなると、目を覆いたくなるような間違いが生じることがある。⁽¹¹⁾ さきのジャルクハンドと同様、文献を引用したり翻訳をする場合でも、ある程度の現地の事情を知る必要があるといえよう。いずれにしても、インドを専門とする人類学者が少ないうえに、現地を踏まずに書く以上、こうした引用はやむをえない事態ではあろう。

実はインド人の研究のなかには、現地においてムンダ人からムンダ語を聞いて調査したはずの言語学の記述研究にも、同様の誤謬を見いだすこともある。すでに、筆者はN. K. Sinha (1974, 1975) のムンダ語文法の矛盾点 (Osada 1992: 17) や Lakshmi Bai (1986) の引用の誤りを指摘 (長田 1990: 162-163) したが、さらに、もう一例をくわえておきたい。Anvita Abbi の一連の研究に記載されているムンダ語が、実際のムンダ語とかけ離れている点である。Abbi (1992) の研究は、インドの系統の違う三つの語族（インド・アーリア語族、ドラヴィダ語族、ムンダ語族）に属する諸言語に共通に見られる複合語構造の起源を、ムンダ語族に求めるという非常に魅力的な説ではあるが、ムンダ語の記述がおかしいので、結論がだいなしになってしまっている。これを残念に思うのは、筆者だけではないだろう。

4

以上、ムンダ民族誌記述の方法論と民族誌記述の意義について簡単に述べた。

最後に、このような詳細なムンダ民族誌の記述が、日本文化や東南アジア文化との比較対照研究⁽¹²⁾に寄与することを望みたい。

ムンダ文化と日本文化および東南アジア文化との類似性を安易には指摘しないが、筆者が六年もの間インド滞在が可能だったのは、ムンダ文化に感じた大いなる親近性であったことを強調しておきたいと思う。

II インドにおける部族“Tribe”の概念について

0

インドにおいては、国内に居住する少数民族を部族“Tribe”と呼びならわしており、本

論の対象となるムンダ人も部族の一つとして認識されている。部族“Tribe”という名称は、人類学の用語としてかなり一般的に使用され、何の疑問もなく従来インドの少数民族にこの名称を用いられてきた。しかしながら、部族という「言葉を正確に」「意味をはっきりさせ」ることによって、学問的に従来の使用が妥当かどうか検討をくわえたい。

本章においては、部族“Tribe”の概念とともに、主としてチョターナーグブル地方に居住する「部族」を指す言葉である ādivāsī (アーディヴァーシー: ādi “original”, vāsī “an inhabitant” ヒンディー語で先住民を意味する) といった用語についても検討をくわえたい。

1

インドにおける部族の概念は、厳密に言えば、人類学における部族の概念とコンテクストを違えているように思える。このコンテクストの相違を明瞭にするために、まずは、人類学における部族の概念について「言葉を正確にし」て論じたい。

比較的新しい社会人類学の入門書によると、

部族はバンドや村などの小地域集団を構成単位とし、ある範囲の地域に住む人々の集まりをさす。彼らは共通の言語や習慣を共有しているのみならず、政治的統合がみられるのがふつうである。(合田編1989: 32)

と、定義されている。ところが、この書は続けて、現実の「部族」は共通の言語がなかったり、まったく政治的統合がみられなかったり、あまりにも大きな偏差が目立つために、「部族概念が茫漠となっている側面がある。」(p.33) のが現状であると指摘している。また、ゴドリエ (1976) は人類学の創始者モルガンから現代にいたるまでの部族概念の変遷を検証し、次のように述べている。

部族の概念が提起したのではなく、それが指示する諸現実をめぐる提起された諸問題を解決するための、あたらしい概念が作りだされなにかぎりは、この概念は、多少とも手のこんだ形態で再生産されてゆくだろうし、善悪いずれにせよ同じ種類の効用をいぜんとして発揮してゆくだろう。(p.167-8)

さらに、「部族や部族主義の概念が、第三世界の若い民族を支配し、抑圧する勢力の政治的、イデオロギー的な操作用具となって」(ゴドリエ1976: 168) いるという現実がある。つまり、「部族という用語には、“未開” というニュアンスがふくまれているし、なによりも植民地支配の歴史と関連している」(合田編1989: 34) ことを忘れてはならない。

このように、今日の人類学においては、むしろなんらかの方法の提示によって超克すべき⁽¹³⁾ 概念となっている。

2

一方、インドにおける部族の概念は、人類学における古典的な部族概念に立脚しつつも、常にカーストと対になって論じられる、きわめて社会的ないし政治的要素をふくむ概念となっている。

インドにおける部族の概念を定義したものとして、S. C. Dube (1977) の説を紹介する。Dube は、以下の六つの項目を部族の特徴としてあげている。

- 1) 部族のルーツが、非常に古い時期にまで遡れること。もし、その地の原住民でないのならば、少なくとも、最古の先住民であること。
- 2) 丘や森によって、比較的隔離された状態で居住していること。
- 3) 歴史感覚が浅く、5・6世代より以前のこととして記憶された歴史は、神話化していること。
- 4) 技術的経済的に低い段階にあること。
- 5) 言語・制度・信仰・習俗といった文化的エートスによって、社会の別のグループから突出していること。
- 6) 平等主義者ではないにしても、少なくとも、非階層的で差別化しない人々であること。

こうした六項目の定義が、現実のインドの部族にあてはまっているかといえば、否である。たとえば、ムンダ人について言及してみれば、まず、2)の項目があてはまらない。筆者が下宿していたムンダ人の恩師宅の近隣には、ムンダ人も住んでいれば、ヒンドゥー農民も住んでいる状態で、とても隔離されているとは言い難かった。4)についても、ムンダ人の農民が周りのヒンドゥー農民よりも貧しいわけでもなく、5)や6)についても、ムンダ語すらしゃべれず、ヒンディー語やサダーニー語（この地方のインド・アーリア語）で生活しているパンチパルガニア地方のムンダ人についてはまったくあてはまらない。とくに、6)についていえば、自分は高カースト（バラモンやクシャトリヤ）に属していると信じて疑わないムンダ人すらいる。

実は、Dube 自身が定義と実態の乖離を感じており、共通の出自、独自のアイデンティティの共有、共通に持つ文化特徴の三項目に定義を移す方が良い (p.4)、と述べている。

しかしながら、かくもあいまいな定義のうえにのり、行政上の観点と社会通念において、インドの部族はカーストと同様の社会階層を表す概念として、位置づけられてきた。このことは、たとえば国勢調査における部族の取扱いに、端的に表れている。⁽¹⁴⁾

英国統治下の1872年に、インドの国勢調査はスタートした。初期の国勢調査にかかわった Baines (1912) は、Tribe を Caste の下位範疇と考えた。しかし、1901年に国勢調査を担当した Risley や1931年に担当した Hutton は、カースト制度に組み込まれていない人々を Tribe と呼んだ。こうした Caste-Tribe 二分法は、実際には様々な問題を生み出した。たとえば、ブミジのように、「部族」でありながら固有の言語を捨て、自らをラジプートと称している人々の存在である。このブミジを Risley (1908: 74) は Tribal Caste と呼んだのだが、この二分法の問題点を計らずも露呈した名称となっている。

独立後、部族とカーストをめぐる社会問題として出てきたのが、指定部族と指定カーストの問題であった。この制度はカースト制度下で社会の最下層に追いやられた人々を救済する

ための制度として、インド共和国憲法に明文化されている。⁽¹⁵⁾ 指定カースト・指定部族の利益を促進し、権利を守ることを目的として、連邦下院と州議会に留保議席を規定（憲法第330条・331条）したり、公的雇用の請求権（335条）を認めている。しかし、結局部族概念のあいまいさやこうした留保制度が政治の道具として使われるために、この制度をめぐる⁽¹⁶⁾、紛糾が絶えないのが現状である。たとえば、さきにあげたブミジ人は、ビハール州南部のチョターナーグプルおよびサントール・パルガナ地方では指定部族、ビハール州のその他の地域では指定カーストとなっている。

このように、行政レベルにおいても、より現実在即した矛盾点の少ない部族概念が必要となっているのであるが、部族政策を視野に入れた研究として Elwin と Ghurye の対照的な意見を紹介しておこう。Elwin は長く「部族」のなかで生活し、数多くの民族誌を書いたこと⁽¹⁷⁾で知られる人類学者である。彼はその著作のなかで、先住民 (aboriginal) を文明から隔離する政策を提唱した。

もし、あなたが先住民を助けようと思うならば、彼を改革しようなどと決して思うな。

むしろ、彼と関わる人々、法律家や医者、学校の先生、行政官、商人こそを改革せよ。

それができるまでは、先住民たちをそっとしておく方がはるかに良い (Elwin 1943: 9)。

Ghurye (1963) の説は反対に、「部族」は単なる「後進的ヒンドゥー」(p.20) にすぎず、その後進性を克服するためには同化 (assimilation)、統合 (integration) しなければならないとして、この統合は行政の問題である (p.207) と指摘している。

Ghurye と Elwin はお互いに自説を掲げて論争をしたのであるが、こうした政策論争とは別に、しかしこの論争に触発されて、Bailey の Tribe - Caste Continuum (部族ーカースト連続体論) が登場する。Bailey (1961) は、⁽¹⁸⁾

我々は「カースト」と「部族」を一線上の対極とみななければならない。(p.13)

と述べる。そして、極としてのカースト社会は有機的 (organic) なのに対し、部族社会は文節的 (segmentary) であるとして、実際の社会がどちらの極により近いかで、部族社会か、カースト社会か呼ぶべきだ (p.14) とし、部族とカーストを不連続な対立 (disjunctive opposition) と見ない点では従来の意見と異なっている。しかし、実際の社会は、理想的なカースト社会も部族社会も存在せず、どんな基準をどうあてはめるかによって、ある社会をカースト社会と呼んでもいいし、部族社会と呼ぶこともできることになる。もちろん、Bailey もその基準として、土地を直接耕す権利をもてば部族、土地を耕すのになんらかの依存関係があればあるほどカースト社会の極に近くなる (p.14) ことをあげている。

Béteille (1974) は、もう一步踏みだして、部族社会の満足ゆく定義はない (p.60) として、Shanin (1971) の農民の概念特徴を検討して、チョターナーグプル地方に住むサントール人、オラオン人、ムンダ人は間違いなく農民 (peasant) であると主張する (pp.64-66)。Béteille は部族社会の基準と考えられる(1)社会規模(2)孤立性(3)宗教(4)生活様式を検討し、イ

インドにはこの基準を満たす部族は実際には存在しないと結論をだした (pp.72-74)。また、⁽¹⁹⁾Bêteille は Bailey の連続体論にも触れ、Bailey のフィールドであるオリッサ州コンドマル県には、土地の権利を基準にできるであろうが、サンタル人やムンダ人にはあてはまらな⁽²⁰⁾いと述べる (p.74)。

以上、インドにおける部族 “Tribe” の概念について述べてきたわけであるが、ようするに部族について、だれもが納得する客観的かつ科学的な基準は存在しないのである。

3

そこで、筆者は「部族」自身による部族像を考察することによって、「部族」概念の見直しを図りたい。つまり、ここではチョターナグプル地方に住むムンダ人が、いかにアイデンティティを確立しているかを、「言葉を正確に」「意味をはっきりさせ」て述べ、ムンダ人による自画像としての「部族像」を前面に押し出したい。

ムンダ人は、伝統的に自分たちと他所者の区別を認識してきた。自分たちを指す語は horo 《人間》、または、abu horo 《我々 人間》であり、他所者は diku である。ムンダ人と共生してきたサンタル人、ホー人、オラオン人、カリヤ人たちも、abu horo または abu haga 《我々 兄弟》と、呼ばれてきた。とくに、サンタル人は、伝統的歌謡のなかでも、常にムンダ人と対になって歌われている。たとえば、

誰が植えたの からし菜を
どなたが植えたの からし菜を
ムンダ人が植えたの からし菜を
サンタル人が植えたの からし菜を
(⁽²¹⁾ジャドゥル歌謡より)

というように、歌われる。

一方、他所者を指す diku といえば、まず想起されるのは、週一回開かれる定期市に来る商人たちである。ヒンドゥーであれ、ムスリムであれ、商人はすべて diku と呼ばれる。

diku/horo の二分法の最大の基準は、言語である。サンタル語やホー語はムンダ語と意志疎通が可能なほど似ているし、ムンダ人が多く住む地域では、オラオン人やカリヤ人もムンダ語を話せる。ラーンチャー市周辺に居住するオラオン人などは、自分たちの言語であるクルク語は話せず、ムンダ語を使用して生活しているほどである。また、ムンダ人の村に住むヒンドゥーの機織屋や鍛冶屋たちもムンダ語が話せるので、horo には属さないが、diku ではない。

人間を表す語彙として、diku/horo の二分法以外に、ムンダ語には jati という単語がある。この jati は、もともとインド・アーリア語起源で、インド・アーリア諸語でもムンダ語でも《民族・カースト》を意味する。たとえば、diku は、diku jati と呼ばれる。ところで、horo jati という複合語がムンダ人全体を指すかといえば、そうではない。horo の場合は、kir-

itan《キリスト教徒》と saōsar《非キリスト教徒》とを区別したうえで、kiritan jati は、horo jati から除外される。この区別は、キリスト教徒のムンダ人と非キリスト教徒のムンダ人は婚姻関係を結ばないという点にある。つまり、ムンダ語の jati とは、厳密には《生まれながらにして所属する内婚集団》を意味する。ムンダ人にとっては、外来文化であるキリスト教を受容したムンダ人は、もはやムンダ人ではなくなるのである。kiritan/saōsar の二分法は、あくまでも自分たちの固有の文化を守ろうとするムンダ人の意識を端的に示している。

余談ではあるが、kiritan は、英語の Christian に起源をもつ語であるが、実はムンダ語ではキリスト教徒を侮蔑する意味があって、kiritan の前では使用してはいけないことになっている。kiritan の前では、やはり英語起源の mison (<mission) を使用するのである。

以上、ムンダ自身による「部族」像として、「言語と固有の宗教を同じくするものたち」という観点をあげておきたい。

4

1940年代以降、チョターナーグプル地方に居住する「部族」にたいして、ādivāsī⁽²²⁾《先住民》というヒンディー語が流布されるようになった。これは、現在も続くジャールカンド運動の指導者たちが「部族」を政治的に統一させようと、1938年に Adivasi Mahasabha を結成して以来、チョターナーグプル地方の「部族」たちにひろく受け入れられてきた。今では、この Adivasi という語は一般に Scheduled Tribe (ST = 指定部族) のヒンディー語による同義語として全インド規模で定着している⁽²³⁾。したがって、Adivasi を部族 “Tribe” のかわりに使うことも可能であるが、本論では使用しない。

というのは Adivasi《先住民》というネーミングには賛同するが、単に ST の訳語であるならば、部族の定義のあいまいさと同様、Adivasi と Non-Adivasi の基準をたてなくてはならない。たとえば、先住民という言葉通りの基準をあてはめると、アッサム地方の茶畑に出稼ぎにいき住み着いてしまったムンダ人やサンタル人は多いが、彼らはアッサム地方の先住民では決してない。また、ādivāsī という語は、政治的な意味あいをもち、学術的な民族誌の記述にはそぐわない面も考慮し、使用しない。

5

以上、インドにおける部族の概念について述べてきたわけであるが、本章の最後に筆者の立場を明らかにしておきたい。

- (1)「部族」という言葉のあいまいさや科学的基準の難しさを踏まえ、植民地主義の影を払拭するためにも、「部族」という用語は、本論では使用しない。
- (2)引用等で使用する場合は “Tribe” を「部族」と訳すが、使用をなるべく限定する。ムンダ族・サンタル族などもムンダ人・サンタル人に統一する。
- (3)チョターナーグプル地方に住む「指定部族」については、現在においてよりニュートラル

な表現と思われる「少数民族」という用語を使用する。人口400万人以上のサンタル人を⁽²⁴⁾「少数」民族とよぶのは問題ではあろうが、インド社会におけるマイノリティであることには間違いないので、「少数民族」とする。「少数」とは、単に数をいうのではなく、社会上の少数派を意味するのである。

III サンスクリット化の検証

0

M. N. Srinivas が、南インドのクールグ地方の社会を研究し、全インド社会にあてはまる社会変動のひとつとして、「サンスクリット化」(Sanskritization) という概念を提唱したのは、1952年のことである。Srinivas (1966: 6) は、「サンスクリット化」の概念について、以下のように定義した。

ヒンドゥー低カーストや部族、その他のグループが、彼らの習慣、儀礼、思想、そして、生活様式を高カースト、一般には再生が約束されたカーストのやり方に変える過程である。

以後、この概念は数々の批判や支持を受けつつ、インド社会を解釈するひとつのキー・ワードとして、定着しつつあるようにみえる。

本章においては、「サンスクリット化」論に対する、そうした批判や支持の論点を紹介しながら、この概念について検証していきたい。さらに、ムンダ人社会からみた社会変動を「ディク化」という新しい概念を導入することによって、考察してみたい。

1

Srinivas の「サンスクリット化」の概念に対する批判は、主たる論点の相違から三つのタイプに分類することができる。

(1) こうした社会変動の過程を認めたうえで、サンスクリットという言葉の名称の使用に異議を唱えるタイプ。⁽²⁵⁾

(2) 高カーストであるパラモンが、「ヴァルナ制」においては一段低位と考えられるクシャトリア化している例をあげて、パラモンだけが「サンスクリット化」の目標ではないとするタイプ。⁽²⁶⁾

(3) 低カーストが常に高カーストの慣習を模倣・採用しているなら、慣習の均一化や上下関係の解消がなされるはずなのに、実際は慣習や上下関係に変化が見られないことを指摘し、この概念は社会の実態をとらえていないと批判するタイプ。⁽²⁷⁾

このような批判にたいして、Srinivas は以下のように反論している。

(1)については、

私はここで、みんながそういう前に、私自身、その単語“Sanskritization”が嫌いであることを指摘すべきである。その語はとても不格好である。しかし私は他の名称を見

つけることができない。(Srinivas 1956: 90)

と、名称がやや不適當であることを認めている。

(2)については、Srinivas (1966: 7) は、

私は、サンスクリット化のバラモンモデルを過度に強調し、他のモデルであるクシャトリア、ヴァイシャ、シュードラを無視した。

と述べ、バラモンモデルに必ずしも拘泥しないと主張し、さらにドミナント・カースト (Dominant Caste: 政治・経済力のあるカースト) モデルを提唱している。(p.8)

(3)については、Srinivas (1966: 30) は、

伝統が生きた時代には、カーストの流動的特徴はある特定のカーストやカースト内の一部の人々の地位的变化をもたらしただけであって、構造的変化は引き起こさなかったということを強調する必要がある。したがって、個々のカーストの地位は上昇したり、下降したりしたが、構造は同じままであった。

と述べて、批判をかわしている。

一方、Srinivas の支持者は、「サンスクリット化」の概念は既成の理論とみなし、事例の検証を提示する試みを行っている。たとえば、B. Cohn (1959) のようにチャマル・カーストのサンスクリット化を証明した研究や日本において小谷汪之のブラブー・カーストへの論及など多数ある。小谷 (1986: 57-86) は、寡婦の再婚を許さない社会慣行の成立を例に挙げて、サンスクリット化の過程を論じている。

2

Srinivas は「サンスクリット化」論の対象として、全インド社会を念頭に置いていたため、当初から「部族」も含んでいた。この章の冒頭にあげた1966年の定義には、はっきりと「部族」をあげているが、すでに1952年の著作で、

インドの森に覆われた山に隠れ住んでいるコミュニティーも、サンスクリット化を受ける (p.214)

と、述べている。そのために、少数民族に対する「サンスクリット化」の検証も進められることになった。チョターナーグプル地方の少数民族も、その例外ではなかった。たとえば、K. N. Sahay (1962, 1967) はオラオン人やパンチパルガニア地方に居住するムンダ人について取り上げているし、Sachchidananda (1978: 164) はオラオン人のタナ・バガット運動をサンスクリット化の一現象ととらえている。⁽²⁸⁾

しかし、「サンスクリット化」の概念を少数民族の社会変動を解明する理論として適用することが、果して妥当なのだろうか。ムンダ人出身の Munda は、「サンスクリット化」概念を少数民族に適用することを、以下のように述べて批判している。

サンスクリット化モデルは、部族民をカースト・ヒンドゥー社会からだけ観察したもので、部族に直接焦点をあてていない。残念ながら、今日まで人類学は部族の社会変動

を理解するために、このモデルに全幅の信頼を寄せてきた。(中略) これらの人類学モデルは、自民族中心主義(エスノセントリズム)によって特徴づけられ、部族の立場に対する共感が、全く欠落している。サンスクリット化は、単に、部族社会をカースト・ヒンドゥーの観点から見たにすぎない。(Munda & Lutz 1980: 87-88)

このような観点は、単なる「サンスクリット化」という名称に対する批判にとどまらず、本質的な概念の見直しを提示している。こういった自民族中心的だという見解は、すでに Colin Rosser (1966: 70) がネパールにおけるネワール人のカーストを論じた研究にも見られる。しかし、Srinivas は、あらかじめその著作にヒマラヤの仏教徒は視野にいれていないので、Rosser の指摘は問題にされなかった。しかし、Munda & Lutz の批判は、当初から少数民族を「サンスクリット化」論の対象としていた Srinivas の理論的欠陥を明瞭にしている。

3

筆者は、Munda & Lutz の批判を出発点に据え、少数民族の立場から社会変動を考察する概念として、「ディク化」Dikuization という用語の使用を提唱したい。つまり、従来の「部族のサンスクリット化」を「ディク化」と読み替えるわけであるが、決して、単なる言い替えであったり、⁽²⁹⁾「サンスクリット化」の裏返しの概念ではない。儀礼や慣習に重きをおいた「サンスクリット化」の指標を改め、日常的に観測可能な「ディク化」の指標を記述して、新しい概念を具体的に提示したい。

まず、ディク diku というムンダ語を「正確に」⁽³⁰⁾検証したい。ディクは前章でも説明したように、ムンダ社会にとっての他所者を指す言葉である。「ディクになる」という言い方があって、これも前章で述べたが、ムンダ社会の言語や習慣を捨ててしまったパンチパルガニア地方のムンダ人のような人々に、「ディクになる」という表現を使う。たとえば、
ako do diku-n ja-n-a-ko

「彼らは、自らディクになってしまった」

と、嘆くのである。多くのムンダ人が「ディクになる」という共通の認識を持った状態を、筆者は「ディク化」と呼ぶ。「ディクになった」状態を具体的にあげれば、それが「ディク化」の具体的な指標となる。

そこで、「ディク化」の指標をあげたい。

(1)まず、日常的に使用する言語が、ムンダ語ではなく、ヒンディー語かサダーニー語やパンチパルガニア語(いずれもヒンディー語と同じくインド・アリア諸語に属し、ラーンチャー市周辺で使用される他方語)である。というのは、diku という単語を動詞として使用すると、「ヒンディー語(あるいは、サダーニー語)を話す」の意味になるからである。教育を受けて、ラーンチャー市や他都市に就職したムンダ人のほとんどは、筆者の知る限り、日常的にムンダ語を使用しない。したがって、彼らの子供たちは、全くムンダ語を知らない。こ

れが、まさしく「ディク化」にほかならない。「ディク化」の第一の指標は、言語である。

(2)ムンダ人の伝統的命名法である「サキ名」を使用しない。「サキ名」とは、親戚や友人から名前をもらって、自分の子供に命名する習慣である。サキ名を選ぶ儀礼は、ムンダ人の重要な通過儀礼のひとつである。この「サキ名」に対して、「ディク名」diku nutum という言い方がある。ディク名とは、ラーマやクリシュナといったヒンドゥー教の神々の名前のように、ヒンドゥー起源の名前である。最近はこうした「ディク名」をつけることが、多くなっている。また、姓についても、伝統的な氏族名 kili nutum を使用せず、少数民族名であるムンダ姓を名乗る。さらに、極端な例としては、ミドルネームにクシャトリヤの名前である Singh を使用することもある。このように、「ディク化」の第二の指標は、名前である。⁽³¹⁾

(3)ムンダ人の伝統的なあいさつを行わない。ムンダ人の伝統的なあいさつは、胸の前に両手を合わせて、軽くおじぎをし、joar とあいさつを交わす。ところが、ディクのあいさつは、屈み込んで、目下の者が目上の者の足に手を触れ、pranām と、あいさつをする。⁽³²⁾「ディク化」の第三の指標は、あいさつとなる。

(4)伝統音楽や舞踊を遠ざける。本来、ムンダ人は歌と踊りを非常に好む。古い格言に、
sen ge susun, kaji ge duran
「歩けば踊りに、しゃべれば歌に」

というほどである。ところが、「ディク化」したムンダ人はこうした伝統音楽や舞踊に関心を示さないどころか、努めて忌避する態度に出る。これは、ヒンドゥー社会では芸能集団が低カーストとみなされてきたために、芸能集団と同一視されたくないという意識が働くためのようだ。このため、伝統的祭りへの参加をやめ、ヒンドゥーの祭りに積極的に参加する例もみられる。⁽³³⁾「ディク化」の第四の指標は、伝統文化への対し方となる。

(5)態度の変化。一般に、ムンダ人はムンダ人仲間に対して友好的で、外部の者が自分たちの利益を損なっていると判断すると、1899年のウルグラン運動にみるごとく、非常に闘争的になる。こうした性格は、ムンダ人社会が望ましい人間として社会的に強く要請するために、例外なく見られる。ところが、「ディク化」すると、この性格は変化し態度が変わってしまう。ムンダ人の格言に、

diku med ci seta med

「ディクの目は、犬の目のようだ」

とあるが、ディクは犬のようにえさをもらえる（利益をもたらす）人には尻尾を振るが、他の人には吠えまわるという認識を持っている。したがって、「平気で嘘をつくようになる」とか、「偉い人には媚びへつらい、庶民には威張るようになる」といった態度の変化も、「ディク化」ととらえられている。「ディク化」の第五の指標は、態度の変化である。

以上、「ディク化」の指標を5項目にわたって説明した。少数民族の社会変動をコース

ト・ヒンドゥーの立場から見た「サンスクリット化」の概念との相違は明白であるが、さらに一点付けくわえておきたい。

それは、ムンダ人が抱く「ディク化」の概念は、指標の第五からもわかるように、決して良いイメージではないことである。これは「ディク化」が、個人の上昇指向に基づく概念であることに、根ざすようである。ただ、第五の指標は、ムンダ人の価値観が絡んでおり、客観的な指標には不適當のように感ずる。

4

本章では、Srinivas の提唱した「サンスクリット化」の概念を、ムンダ人の立場から検証し、新たに「ディク化」という概念を提示する論を展開してきた。この概念は、ムンダ人も含むチョターナーグプル地方に居住する少数民族をも、視野に入れた提案である。「ディク化」の指標として、1. 言語、2. 人名、3. あいさつ、4. 伝統文化、の4点をあげた⁽³⁴⁾。 「サンスクリット化」のイデオロギーだけが先行し、客観的観測が難しい概念と相違し、誰もが観測可能な指標である。

最後に、「サンスクリット化」が「未開」から「文明」への進歩ないしは発展の過程であるといった概念こそが、一番の問題点であることを指摘しておきたい。柳田の目指した日本民俗学が、怒濤のように押し寄せる欧米文化による古来の民俗文化の変質と崩壊をまのあたりに見て、追われるごとく語彙を収集していったことを想起されたい。

IV 「自然指向型社会」対「規範指向型社会」

0

ムンダ人の側からのムンダ民族誌の確立を目指して、筆者はこの小論を展開してきた。「II章 部族の概念」や「III章 サンスクリット化の検証」は、従来カースト・ヒンドゥーからの、つまりは、外部からの視点によってのみ考察されてきた少数民族の実態を、内から光をあてて、論及してみたわけである。

本章では、ムンダ人社会を「自然指向型社会」ととらえ、ヒンドゥー社会を「規範指向型社会」と考えることにより、「ディク化」を「自然指向型社会」から「規範指向型社会」への移行としてとらえる。このために、ムンダ社会と外部（ディク）社会との接触と葛藤を歴史的に振り返りつつ、小論のまとめとしたい。

1

チョターナーグプル地方に居住する少数民族とりわけムンダ人が歴史に登場するのは、非常に古い時代にさかのぼる。S. C. Roy (1912) によると、リグ・ヴェーダにもたびたび取り上げられているという (p.15)。しかし、こうした記載は断片的なものであり、そこからムンダ社会の実態やまして外部文化との関わりを考察することは、不可能である。

近代に入って、大英帝国がインドへの侵略を開始し、イギリス人の政治的経済的論点から

のインド社会に関する文献の量が飛躍的に増加し始める。それとともに、ムンダ人についての記述は具体性を増してくる。

英国軍の一大尉が東インド会社社員として、初めてチョターナーグプル地方に足を踏み入れたのが、1770年のことである。以後、英国の植民地政策の強化に対して、チョターナーグプル地方のあちこちで、武力蜂起や反乱が頻発することになった。ムンダ人はこうした武力闘争の主力を担い、「戦闘的部族」として知られることになった。

なかでも、1831-32年に起こったムンダ人やオラオン人による大規模な反乱であるコルの反乱(Kol Insurrection)と、1895-1900年に英国支配下のインド政府を動揺させたビルサ・ムンダを指導者とするウルグラン運動は、インド独立闘争の先駆をなすものとしてよく知られている。この二大闘争を頂点として、散発的な少数民族による抵抗運動は、1938年の先住民協会(Adivasi Mahasabha)の結成により、新たな展開をみる。これは、先住民協会が少数民族の要求を政治的に汲み上げる組織化のなかで、インド独立達成に協力していったからである。

こうした19世紀から20世紀初頭にかけての少数民族の抵抗運動の歴史的評価は、立場の違いで、かなり相違したものになるようだ。政治経済運動とみなすものもあれば、一種の宗教運動とみなしたり⁽³⁷⁾、農民運動の一形態ととらえる場合もあり、さらには、単に便宜上部族運動と一括するものもある、といった具合である。最近の注目すべき研究にK. S. Singh⁽³⁸⁾ (1983)の「ウルグラン運動=千年王国運動説」がある。

筆者は、こうした抵抗運動を「自然指向型社会」であるムンダ社会をはじめとする少数民族社会が、「規範指向型社会」であるヒンドゥー社会をはじめとするディク社会に吸収されていく際の政治的経済的文化的摩擦ととらえている。英国の植民地政策が、こうした転換を促進したともいえるだろう。

独立後も、英国支配がインドの多数派であるヒンドゥー支配に変更されただけで、矛盾や摩擦は、少数民族の立場に立つ限り、解消されたわけではない。そこで、今日のチョターナーグプル地方の少数民族は、自分たちを中心とした独立州(ジャールカンド州)設立を要求するジャールカンド運動を展開している。⁽⁴¹⁾

つまり、「自然指向型社会」が「規範指向型社会」にとりこまれていく過程は、歴史的にも現在も進行しつつある現象なのである。しかしながら、通時(歴史)レベルと共時(現状)レベルの混同は避けねばならない。ここで想起するのは、柳田國男が提唱した方言周圏論である。方言周圏論とは、

方言が文化的中心地を中心に同心円状に分布する場合は、外側から内側に向けて順次変化して来たと推定されるという、方言分布の解釈の原則のひとつ(柴田1980:223)である。すなわち文化的中心地から遠いところに古い方言形がみられることを、柳田は「かたつむり」を例に検証した。もちろん、この柳田の説は全ての例にあてはまらず、今では周

圏論は成立しないという考えが支配的になったが、「現在でも周囲圏論は、いくつかのある原則の一つとして生きており、永久に死なない」(柴田1980:226-227) ののである。方言周囲圏論をそのまま適用できないまでも、共時研究が通時的变化をあきらかにしている点に注目したい。つまり、文化的中心から遠くはなれた地域のムンダ文化が、歴史的にもっとも古いムンダ文化を残していると考え、こうした伝統的ムンダ社会とディク社会を共時レベルで比較することは、通時的な変化も理解できると考えられる。いいかえると、現在伝統的ムンダ社会でみられる「ディク化」は、すでにヒンドゥー社会とほとんど変わらないパンチパルガニア地方のムンダ社会において、過去に同じ様な「ディク化」が起こったと考えるのである。ようするに、ムンダ社会のディク化を跡づけることにより、「自然指向型社会」が「規範指向型社会」に取り込まれていく過程が解明されることとなろう。

しかるのちに、ムンダ人の世界観を具体的に検証することで「自然指向型社会」の全体像を提示し、合わせて、ディク社会の世界観と対比することで、「規範指向型社会」について検証していきたい。

2

前章でも触れたムンダ人学者の Munda (1986) は、チョターナーグプル地方の少数民族のアイデンティティの特徴とその危機を分析し、下記のような表を作成した。

アイデンティティの基本	中心的価値	危機の要因
地理	統一	不統一
社会	平等	階層
経済	集産主義	個人主義
歴史	適合	収奪(搾取)
政治	民主主義	家父長主義
宗教	自然主義	儀礼主義
哲学	倫理的生活	腐敗
文学	民衆主義	都会主義
芸術音楽	グループ参加	鑑賞(傍観)

このような分析は、ムンダ社会に育ち、アメリカの大学で学究生活を送った Munda の Minority から Majority への異議申し立ての側面がある。しかればこそ、Munda 自身によって立つべきムンダ社会が抱える問題点が、過不足なく把握されているのである。この一連の Munda の研究を出発点にして、「自然指向型社会」が「規範指向型社会」に取り込まれていく過程を、項目をあげてみていきたい。

ところで、Munda 自身は、チョターナーグプル地方の少数民族全体を視野に入れてこの表を作成したのであるが、筆者はムンダ社会に限定して、論を進めていきたい。

地 理

チョターナーグブル地方は高原状の地形をなし、少数民族は高原に広がる森林を利用して、狩猟採集民から農耕民までが、多少の紆余曲折は経ながらも、今日まで平和に共生してきた。ところが、1960年代以降の急速な工業化によって、森林が伐採され、土地が収奪され始め⁽⁴²⁾る。そこに、危機が発生した。Munda のこの認識に、付けくわえるべきものは何もない。

社 会

ムンダ人を含む少数民族の社会は、男女平等で、身分制度は存在しない。よく知られた事実だが、カースト・ヒンドゥーにおいては、ゴミを拾うカーストに属する人以外は、決してゴミを拾おうとはしない。その点、ムンダ社会では、すべての人が掃除もすれば食事も作り田畑を耕し薪も割る。

ムンダ社会の持つ平等主義については、ムンダ語の特徴からも証明可能である。身分社会に付属する尊敬語の形態から証明するのである。ヒンディー語やサダーニー語には、尊敬の度合によって三種類の二人称代名詞が存在する。とくにチョターナーグブル地方においては、āp (ヒンディー) または raur (サダーニー) 《あなた》は、尊敬すべき人や一般に使用され、tum 《おまえ》は、親しい友人か身分の低い人に対して使われる。ただし、同じヒンディー語といっても、デリーなどで使われるヒンディー語と相違して、āp の使用頻度が高く、tum の使用頻度が低く、さらに tū (一番ぞんざいな二人称。ただし、神にたいしてはこれを用いる) はほとんど聞かない。一方、ムンダ語の二人称代名詞は、尊称と蔑称の区別はなく、am 一語である。

こうした平等社会が、階層的なディク社会と接触することにより、民族のアイデンティティは危機にさらされ、さまざまな矛盾をはらみつつ、ディク化が進んでいくことになる。

経 済

Munda が、集産主義 (Collectivism) と呼ぶ経済状況を具体的に述べれば、ムンダ人はクトゥカティ制 (kūtkatī) とよばれる伝統的な土地制度をもつ⁽⁴³⁾。それによると、土地や森林の所有権は同じリネージ (kūt: 祖先と各成員の関係を具体的・個別的に示すことのできる集団) に属する。村はほとんどの場合、同じリネージからなるので、つまるところ村単位で共有していることになる。こうした村単位による生産と消費を集産主義といっている。一方、カースト・ヒンドゥーは個人や家族を基盤とした経済活動を行い、貧富の差が大きい。この経済の個人主義が、集産主義を切り崩していくことから、危機的状況が生じてくるのである。

歴 史

ムンダ人は第II章でも述べたごとく、サンタル人といった他の少数民族も包含して、お互いに尊重しあい、共生してきた歴史がある。しかし、19世紀以降、カースト・ヒンドゥーや英国植民地政策の下部組織といったディクが侵入し、収奪や搾取の歴史が展開され始める。

政治

ムンダ人は、かつて日本の村落にみられた「寄り合い」に似た、村長 (hatu munda) を中心とした民主的な合議制の伝統を持っている。合議のための集会は pancait とよばれ、村の地区 (tola) レベル、村 (hatu) レベル、村落間レベル (pati、または parha) に設けられ、問題の大きさに合わせ、それぞれのレベルの集会で合議される。それに対して、ディク社会は家父長に権力が集中する傾向がある。

宗教

ムンダ人の宗教は、サルナ信仰⁽⁴⁴⁾と呼ばれる一種のアニミズムである。サルナとは聖なる林をさし、新しく村落を開く際に、原生林をサルナとして残しておき、ボンガと呼ばれる神ないし精霊を祀るのである。ボンガは山や川、そしてあらゆる自然に宿り、人々の幸不幸はすべてボンガの意のままと考えられている。ムンダ人は不幸から免れ、幸福を授かるように、熱心にボンガへ捧げものをなし、宗教的儀礼を執り行う。

筆者はこうした儀礼に何度か参加して驚いたのは、普通儀礼につきものの形式や厳肅さがみられなかったことである。たとえば、何か祈りの言葉を唱えている途中であっても、水が飲みたければ飲むし、酒が飲みたくなれば飲むといった調子で、要は祈る人の思いが真摯であればボンガに通じると考えられている。参加者も祈りの言葉を聞くわけでもなく、勝手に酒を酌み交わし唄い踊り、祈っている人も側の人に冗談をいったりしている。ただ、祈りを捧げる人は、前日から食事をせず、それぞれのボンガに即した色のついた動物（主ににわとりとヤギ）をいけにえとした供儀が行われる。

ムンダ人の祭は、サル（沙羅双樹）の花が咲く頃行われる祖先供養のための「花祭り」と12月の収穫祭の「マゲ祭り」が代表的である。祭りの日には、村人たちは村の広場であるアカラに集まり、米から作られた日本酒に似たイリという酒を飲み、唄いかつ踊る。いずれも、自然と深くかかわった祭祀である。

ムンダ人のこのような自然主義的な宗教に対して、ディクの宗教は、ヒンドゥー教であれ、イスラム教であれ、キリスト教であれ、形式的で儀礼中心主義である。シヴァやヴィシュヌやアッラーやエホバを真に信仰しているかどうかではなく、サフラン・ローブに身を包んでヒンドゥー寺院にお参りするとか、顎髭をのばしてムスリム帽をかぶるとか、十字架を胸に教会へ通うとかが問題なのである。とくに、キリスト教に改宗したムンダ人は多数にのぼり、ムンダ人キリスト教徒によって、ムンダの豊穡儀礼はわいせつであると忌避されたり、教会の規律がボンガよりも重んじられるといった風潮がますます強まっている。ムンダ人のサルナ信仰は、キリスト教も含めたディクの宗教の前にいまや風前のともしびとなっている。

哲学

前章にも述べたように、ムンダ人は仲間に対して正直で誠実でやさしく助け合うといった倫理的態度を貫こうと非常に努力する。ところが、万事に利害が絡むディク社会との接触に

よって、こうした倫理観が崩壊しつつある。モラルのないディクが口先で騙したり、賄賂を使って官憲と癒着したりして、モラルを守ろうとするムンダ人が損をしている事例は、チョターナーグプル地方では日常茶飯事である。

芸術・音楽・文学

ムンダ人の音楽は、主として祭りや一族の祝い事の宴会で全員が参加し、唄いかつ踊って楽しむものである。歌詞は現世肯定の色彩が濃く、文学もこうした歌謡や叙事詩やなぞなどといった制作者不明の民衆文学である。こうした伝統芸術のありさまは徐々に崩れていき、とくにダンスや歌が上手な人だけが舞台に立つようになり、お金を払って鑑賞するスタイルが増えてきている。ここに、村の伝統文化の危機的状況がある。

3

以上、筆者の論を重ねながら Munda の論旨を紹介してきたわけであるが、Munda はこの危機の克服を政治運動によるべきであるとするムンダ人のリーダーとしての自覚から発する政治的メッセージが含まれている。⁽⁴⁵⁾ 筆者自身はこの分析に立って、ムンダ社会をはじめとする少数民族社会を「自然指向型社会」とし、Munda があげた危機的状況を生み出すディク社会を「規範指向型社会」としてとらえる。

Munda のあげた九項目にわたる危機の要因のうち主たるキー・ワードは何かという問題から、筆者の論点が生まれてきた。つまり、このキー・ワードを宗教ととらえたことに、筆者の論の基礎がある。Munda 自身のメッセージからは、むしろ「平等社会」対「階層社会」といった論点のほうが、重視されている。しかし、平等をたてまえにおくとキリスト教社会はムンダ社会にとって外的要因でありながら、決して階層社会とはいえない。しかも、ムンダ人が共生しつつも一段低く見られている鍛冶屋や織物屋の存在をもって、ムンダ社会を「平等社会」とする論理に異議を唱えることもまた可能なのである。

キリスト教の持つ平等思想がムンダ人に受け入れやすかったことが、ムンダ人にキリスト教徒が増加した理由であろうが、ビルサ・ムンダの運動において、キリスト教会がクリスマスにビルサ・ムンダに共鳴して立ち上がった人々に襲われたことから、キリスト教をムンダ伝統社会を圧迫する存在としてヒンドゥー教やイスラム教と同じ類のものと、ムンダ人自身が判断していたことは明瞭である。ムンダ人自身の問題にせよ、ディクの問題にせよ、インド社会における宗教の問題は、計り知れぬ重さを持つ。ムンダ人の生活も年中行事も宗教と切り離しては、考えられないのである。そこで、「宗教：自然主義－儀礼主義」をキー・ワードに「自然指向型社会」対「規範指向型社会」という概念に⁽⁴⁶⁾たどり着くにいたったのである。

Munda の分析を基本に据え、「自然指向型社会」と「規範指向型社会」を、次のような表にまとめた。

アイデンティティの基本	自然指向型	規範指向型
生態系	調和的	非調和的
社会	平等的	階層的
歴史	共生的	略奪的（進取的）
政治	民主的	家父長的
経済	集团的	個人的
宗教	自然崇拜	教義主義
哲学	倫理的	非倫理的（異集団に対し）
芸術・音楽・文学	大衆的	専門的

地理については、もう少し大きな視点から生態系とした。ここで、想起されるのは先進工業諸国のエコロジー運動である。「規範指向型社会」の到達点が、公害や地球温暖化現象といった自然界との不調和なのだが、そこに、「自然指向型社会」への回帰運動としてエコロジー運動が立ち現れたと判断することができようが、むしろ「自然と共生しなければならない」という、新たな規範の創出と見たほうが正しいであろう。自然指向型社会では、「・・・しなければならない」式の規範はない。ムンダ社会においては、

bonga-ko ka-ko suku-a

「・・・しなくては（しては）ボンガたちが好まない」

という表現を使う。

これまでの論を下図に示しておく。

自然指向型社会（自然中心主義）→規範指向型社会（人間中心主義）

4

以上、「自然指向型社会」対「規範指向型社会」論をムンダ民族誌記述の基本におく論旨を簡単に述べた。この論旨は、ムンダ人社会のみならず、自然と共生してきた縄文文化の弥生文化への移行といった歴史的出来事へも、東南アジアの少数民族社会の変化といった現状分析にも、展開は可能と思える。

謝辞

小論の一部はすでに第24回南アジア研究集会で「ムンダの社会と文化」と題して、口頭発表したものである。発表の機会を与えて下さった、一橋大学の谷口晋吉教授に感謝いたします。

注

(1) Dumont (1970: 46-61) 及び Dumont & Pocock (1959) を参照。この浄／不浄の二項対立

- がカースト・ヒエラルキーの原理をなす (Dumont 1970: 59) という説はインド社会の研究に多大の影響をあたえた。しかし最近では、この浄・不浄論がバラモン中心主義として批判され、カースト・イデオロギーを地方の王権や村のドミナント・カーストとの関連で論じられる傾向にある。田中雅一 (1986)、田辺 (1990)、八木 (1991)、小林 (1992) など参照。
- (2) Redfield (1956) が提唱した概念で、知識人が担う大伝統と民衆のもつ小伝統を区別し、インド社会の分析枠組みによく用いられる。たとえば、Marriott (1955)、Singer (1972) など。またインド社会ばかりでなく、チョターナーグプル地方に住む少数民族社会の分析にも使われている。Orans (1965)、Surajit Sinha (1959) など。
- (3) 「規範主義」と「記述主義」の用語は田中克彦 (1983) の第一章にしたがったが、「記述主義」という用語は一般的ではない。筆者自身は「記述的言語研究」(ブルームフィールド) や「記述言語学」(グリースン) に「記述主義」というレッテルをはることに抵抗がないわけではない。したがって「いわば」とただしがきをつけた。
- (4) 石毛 (1985) によると、「しばしばコメの飯が食事そのものをしめすことばとして用いられることは、東アジアばかりでなく、東南アジアの各地にも共通する」(23頁)。
- (5) 辞書的にいえば、ヒンディー語 (H.) やサダーニー語 (Sd.) にも次のような区別がある。dhān (H.Sd.) 《稲》, cāwal (H.), cāur (Sd.) 《米》, bhāt (H.Sd.) 《ご飯》。しかし、この区別は厳密なものではなく、cāwal や cāur が英語の「rice」と同じように使われることが多い。cāwal ka khet (H.) 「水・陸稲田」 cāur khābe (Sd.) 「ご飯食べるか」。一方、ムンダ語の場合には cauli-m jom-e-a と mañdi-m jom-e-a では明らかに意味がことなり、前者は《米粒》を、後者は《ご飯》を食べることを意味する。
- (6) Zide & Zide (1976: 1330) は狩猟から農耕への移行モデルに逆行した例として、ミンダナオ島の Stoneage Tasaday 人をあげている。彼らは500年前に分派しジャングルに逃げ込み、農耕を捨て、狩猟採集民になった明らかな根拠があるという。
- (7) 詳しくは、松井 (1983) などを参照。
- (8) 基礎語彙とは、「日常の生活に欠くべからざる使用度数の高い諸単語」(服部1960: 37) である。基礎語彙調査票としては、服部 (1956)、およびアジア・アフリカ言語調査票、上 (1966)、下 (1967) がある。また、峰岸 (1991) が電算機処理を念頭において、二つの調査票を整理しているのも、とても役に立つ。
- (9) MG や EM の問題点については、詳しくは長田 (1992c) 参照。
- (10) ムンダに関して、Parkin の一連の研究があるが、Parkin (1992: iv) によると、健康上の理由でフィールド・ワークは行っていない。また、1970年代には Standing (1976) や Kessel (1975) の博士論文があるが、残念ながら出版されていない。筆者の知る唯一の例外は Babiracki (1991a,b) による民族音楽学の研究がある。一方、現地調査をあまり必要としない、センサスなどの資料を使った外国人による研究は1980年代以降もかなり多い。MacDougall (1985)、Derné (1985, 1991)、Corbridge (1988) など。
- (11) たとえば、斎藤 (1984, 1989, 1991) のカタカナ表記はかなりひどい。キュリン curin

(1984: 318)、正しくはチュリン； スナム・ボンガ sunum bongga (1984: 313)、正スナム・ボンガ； クリン curin (1989: 97)、正チュリン； キヤンド cando (1989: 88-9)、正チャンド。

また、ムンダ人の言語を Mundari と表記するために、ムンダ族とムンダリ族が違う「部族」であるといった間違いも見られる。たとえば、吉田 (1985: 84)。なお、言語学では Munda という名称を系統を同じくするムンダ語族やムンダ諸語の意味で使い、Mundari を個別言語名として使う。三省堂の言語学大辞典では、それぞれにムンダー諸語とムンダリー語の訳語を与えているが、筆者は個別言語名 Mundari をムンダ語と呼び、Munda に対応する語にムンダ諸語をあてる。

- (12) 言語学においては、「比較」と「対照」を厳密に区別している。「比較文法」(Comparative Grammar) という場合には、二言語、あるいは二つ以上の言語間の通時レベルの考察を主とし、同じ系統に属する言語を問題とするのに対し、「対照文法」(Contrastive Grammar) には通時的考察は含まず、共時レベルで二言語、あるいは二つ以上の言語間の文法構造の類似性や相違について研究する。したがって、比較言語学は歴史（または史的）言語学の一部と考えられている。一方、「比較文化」とか「比較文学」という場合にはこうした区別はないようだ。

本論では、あくまでも言語学の立場を貫くために、「比較」と「対照」を区別して用いる。

- (13) 合田編 (1989: 34) によると、「それにかわって、エスニック・グループ (ethnic group) という用語が使用されはじめた」。また、最近ではエスニシティという用語もよく使われる。綾部編 (1985) 参照。なお、アフリカの「部族」については、原口 (1975) 参照。
- (14) インド国制史における部族については、藤井 (1988) に詳しい。
- (15) 指定部族・指定カーストの制度上の問題点については、押川 (1981、1982) を参照。
- (16) 1990年に、後進クラスの留保率をあげたことをめぐって、高いカーストの人々の焼身自殺による抗議行動はまだ記憶に新しい。
- (17) Elwin については、小西 (1986: 208-230) に紹介がある。また、Elwin の著作については、藤井 (1987) を参照。
- (18) Ghurye (1963: 173) によると、

‘Dr. Elwin desired to see them not only protected in their interests, which need such protection, but also stabilized in their old tribal culture or cultures. Dr. Elwin was, in respect of them, a revivalist. He was thus both a no-changer and a revivalist.’

一方、これに対して Elwin (1977: 30) は、こう反論している。

‘Dr. Ghurye, for whom I have the greatest admiration, has also recently attacked me as an isolationist, a no-changer and a revivalist. ……As a professional controversialist, I feel that this is not only unfair, but unwise. There is, of course, nothing wrong in being an isolationist or a revivalist.’

- (19) この Tribe-Caste 連続体論は、その極をめぐって論争が起こる。以下の論文を参照のこと。
S. Sinha (1965、1973) Misra (1977)。なお、甲田 (1977) がこの連続体論を紹介している。

- (20) さらに、Béteille (1986) は、「部族」がこれまでに触れられていない基準である集団的自己同一性 (Collective Identity) に基づいて、再編成されていく現状を指摘した後、次のように結論づけている。

‘It is true that collective identities have proved far more durable in the face of economic and political change than was earlier envisaged. But the collectivities to which the label “tribe” will remain attached will depart in both form and function further and further from what can reasonably be described as tribes.’ (p. 318)

また、Béteille の他にも、Lucas (1984 : 91) の以下のような指摘がある。

‘In view of critical discussions of the concept of tribe, it can no longer be taken for granted that the tribal designation is appropriate for Munda, Oraon and certain other peoples of Chotanagpur and neighbouring regions.’

- (21) 原文 (ローマ字表記) を下にあげておく。

okoe ge her-le-d-a mani do

cimae ge pasir-le-d-a rai

munda-ko ge her-le-d-a mani do

santa-ko ge pasir-le-d-a rai

ムンダの伝統的歌謡では、ムンダ人 (munda) / サンタル人 (santa) のような対がよく用いられる。たとえば、誰が (okoe) / どなたが (cimae)、芥子菜 (mani) / 芥子菜 (rai) など。なお、詳しくは別稿 (長田1993a) を参照。

- (22) Adivasi という用語の歴史的経緯は、藤井 (1988 : 74-77) を参照。
- (23) インド政府の正式なヒンディー語訳は、anusūcit janjāti である。
- (24) もちろん、民族という概念も検証されなければならないが、現在筆者の関心のあるムンダ人に関して直接かわらないし、あまりにも大きな問題をはらんでいるので、以下の参考文献をあげるにとどめる。川田・福井編 (1988)、岡・江上・井上編 (1991)、内堀 (1989)、名和 (1992)。
- (25) たとえば、Staal (1963 : 275) は次のように指摘している。
- ‘Sanskritization as used by Srinivas and other anthropologists is a complex concept or class of concepts. The term itself seems to be misleading, since its relationship to the term Sanskrit is extremely complicated.’
- (26) たとえば、S. K. Srivastava (1963) は脱サンスクリット化 (Desanskritization) をあげ、Kulke (1976) はクシャトリヤ化 (Kshatriyaization) を論じ、Sinha (1962) はラジプート化 (Rajiputization) を提唱している。
- (27) 年代的にはずっと後のことになるが、日本人による指摘をあげておく。山田 (1988 : 41) は、「サンスクリット化概念の難点は、地位上昇を意図して低カーストがつねに高カーストの慣習を模倣・採用しているにも拘らず、当然予想される慣習の均一化や上下関係の解消が一向に見られないことである」と述べている。

- (28) タナ・バガット運動について、K. S. Singh (1988) は千年王国主義が独立運動の柱であるナショナリズムに移行していく過程ととらえている。
- (29) 少数民族に関して、すでに、サンスクリット化と反対に、カースト・ヒンドゥーが「部族化」(Tribalization) するケースが報告されている (Kalia1959) し、また、Gautam (1977: 212) はサンタル人について、サンスクリット化よりも、むしろ自分たちの伝統に回帰しようとするサンタル化 (Santalization) を提唱しているが、いずれも現象面をとらえた批判にとどまっている。
- 少数民族の社会変動に対し、「サンスクリット化」という概念をそのまま適応することには抵抗があるようで、「ヒンドゥー化」(Hinduization: Carrin-Bouez1978) や「脱部族化」(Detribalization: Moser-Schmitt1978) といった提唱がなされている。いずれにせよ、少数民族からの視点が欠けていることは否めない。
- (30) S. Sinha, J. Sen, Panchabai (1969) に Diku の概念についての研究があるが、ディクがディクの言葉で調査をしたのでは、ディクの本来の意味がよくわかるとは思えない。
- (31) ムンダ人の人名については、別稿 (長田1992a) を参照。
- (32) ムンダ人のあいさつについては、別稿 (長田1992b) を参照。
- (33) ムンダ人の音楽と舞踊については、別稿 (長田1993a) を参照。
- (34) サンスクリット化の指標として、よくあげられるのは菜食主義や禁酒がある。しかしながら、菜食主義や禁酒を唱える人が隠れて、肉を食ったり、酒を飲んだりすることはインドでは決して珍しいことではない。これについて、客観的観測はほぼ不可能である。
- (35) コルの反乱については Jha (1964)、ウルグラン運動については、K. S. Singh (1966, 1983) を参照のこと。これ以外にもサンタル人のフル闘争 (Datta1940) などがある。
- (36) たとえば、K. K. Verma & R. Sinha (1980)。
- (37) たとえば、Derné (1985, 1991)。
- (38) たとえば、A. R. Desai ed. (1979)。
- (39) たとえば、M. S. A. Rao ed. (1979)、K. S. Singh ed. (1982)。なお、こうした運動に対する見解の相違は、単なる立場の違いによるのではなく、個々の運動によって、歴史的評価が異なる点も指摘しておかねばならない。
- (40) 千年王国運動とは、「人々が超自然的な至福の時期の到来を期待し、準備するような運動」(ワースレイ1981: 19) をさす。すでに、ワースレイ (1981ただし原書は1968) は、このウルグラン運動 (=ビルサイト運動) を千年王国運動と位置づけている (訳文295頁と320頁。訳文はピアサイト運動となっているが、正しくはビルサイト運動である)。また、Singh (1983) の先行研究として、Jay (1961) の再生復興運動や Fuchs (1965) のメシア運動の研究、さらに Devalle (1980: 14-17) がウルグラン=千年王国運動説を展開している。
- (41) ジャールカンド運動については、以下参照。K. L. Sharma (1976)、Sengupta(ed) (1982)、K. S. Singh (1985)、Corbridge (1988)、Munda (1988)、Devalle (1992)、Narayan (ed) (1992)、長田 (1993b) など。なお、現在筆者がジャールカンド運動について執筆中で、『叢

書カースト制度と非差別民』全五巻（明石書店）の第三巻に収録される予定。

- (42) 1960年代以降、次のような企業が進出した。

HEC (Heavy Engineering Corporation)

MECON (Metallurgical Engineering Consultants)

SAIL (Steel Authority of India)

CCL (Central Coalfield Ltd)

CMPDI (Coal and Mining Programme and Designing Institute)

また、こうした企業進出にともなう土地収奪の実態については、S. p. Sinha (1968)、S. N. Dubey & R. Murdia (1977) を参照。

- (43) 詳しくは、Encyclopaedia Mundarica (EM) pp.2388-2401、K. S. Singh (1978) 参照。

- (44) サルナ信仰については、van Exem (1982) を参照。また、サルナ信仰の危機的状況については、van Exem (1978) を参照。

- (45) この Munda の論旨をジャールカンド統一委員会 (Jharkhand Coordination Committee) から、パンフレットの形で出版している。Position Paper for the Third Round of Talk between the Jharkhand Coordination Committee and the Central Government at New Delhi, August 11, 1989 の14頁参照。

- (46) なお、おもにウィーン学派とよばれ、文化圏説を唱える学者が自然民族 (Naturvölker) という用語を、文化民族 (Kulturvölker) の対語として、使用している点は指摘しておいた方がよからう。たとえば、シュミット・コッパース (1970)。

参考文献

Abbi, Anvita (1985) 'Reduplicative Structures: A Phenomenon of the South Asian Linguistic Area', V. Z. Acson and R. L. Leed (eds) *For Gordon H. Fairbanks*. 159-171.

Abbi, Anvita (1991) 'Identity Crisis of Dative Subjects and Experiencer Nominal in Indian Languages', *International Journal of Dravidian Linguistics* 20-1:1-50.

Abbi, Anvita (1992) *Reduplication in South Asian Languages: An Areal, Typological and Historical Study*. Allied Publishers, Delhi.

Abbi, Anvita (1992) 'Contact, Conflict, and Compromise: The Genesis of Reduplicated Structures in South Asian Languages', E. C. Dimock, Jr., B. B. Kachru, Bh. Krishnamurti (eds) *Dimensions of Sociolinguistics in South Asia: Papers in memory of Gerald Kelley*. 131-148. Oxford & IBH, New Delhi.

Abbi, A. (ed) (1991) India as a Linguistic Area Revisited. Special Issue. *Language Sciences*. 13-2.

Abbi, A and M. K. Mishra (1987) 'Aspectual Elements of Simultaneity and Iteration in Indian Languages: A Case for an Areal Universal.', *Studies in the Linguistic Sciences* 17-1: 1-14.

青木晴夫 (1980) 「アメカサ」、*月刊言語* 9-6: 2。

アシュワース、ジョージナ編。辻野功・仲尾宅・加藤清弘・沢田俊明・鈴木清史・浜嶋聰・河野

めぐみ訳 (1990) **世界の少数民族を知る事典**。明石書店。

綾部恒雄編 (1985) **文化人類学 2 「特集＝民族とエスニシティ」** アカデミア出版会。

Babiracki, Carol (1991a) *Musical and Cultural Interaction in Tribal India : The "Karam" Repertory of the Mundas of Chotanagpur*. Ph. D. Dissertation. University of Illinois.

Babinacki, Carol (1991b) 'Music and the History of Tribe-Caste Interaction in Chotanagpur', S. Blum, P. V. Bohlman, D. M. Neuman (eds) *Ethnomusicology and Modern Music History*. 207-305. University of Illinois Press.

Bailey, F. G. (1961) "'Tribe" and "Caste" in India', *Contributions to Indian Sociology* 5:7-19.

Baines, (1912) *Ethnography*. reprint in 1976. Concept Publishing Company, Delhi.

Béteille, André (1974) *Six Essays in Comparative Sociology*. Oxford University Press, Delhi.

Béteille, André (1986) 'The Concept of Tribe with Special Reference to India'. *Journal of European Sociology* 27:297-318.

ブルームフィールド、L. 三宅鴻・日野資純訳 (1962) **言語**。大修館書店。

Carrin-Bouez, Marine (1978) 'Acculturation and/or Dialectics : The Relevance of the Hinduization Model for the Understanding of Santal Society', Moser & Gautam (eds). 83-92.

Cohn, Bernard (1959) 'Changing Traditions of a Low Caste', Singer (ed) 207-215.

Corbridge, Stuart (1988) 'The Ideology of Tribal Economy and Society : Politics in the Jharkhand, 1950-1980', *Modern Asian Studies* 22-1:1-42.

Datta, K. K. (1940) *The Santal Insurrection of 1855-57*. Calcutta University Press, Calcutta.

Datta, K. K. (1957) *Freedom Movement in Bihar*. Government of Bihar, Patna.

Derné, Steve (1985) 'Religious Movements as Rite of Passage : An Analysis of the Birsa Movement'. *Contributions to Indian Sociology* N. S. 19-2:251-268.

Derné, Steve (1991) 'Purifying Movements and Syncretic Religious Movements : Religious Changes and the 19th Century Munda and Santal Peasant Revolts', *Man in India* 71-1 & 2: 139-149.

Desai, A. R. (ed) (1979) *Peasant Struggles in India*. Oxford University Press, Delhi.

Devalle, Susana B. C. (1980) 'Nineteenth Century Peasant Protest in Chotanagpur : A Retrospect', P. Dash Sharma (ed) *The Passing Scene in Chotanagpur : Sarat Chandra Roy Commemoration Volume*. 8-24. Maitryee Publications, Ranchi.

Devalle, Susana B. C. (1992) *Discourses of Ethnicity : Culture and Protest in Jharkhand*. Sage, Delhi.

Dube, S. C. (ed) (1977) *Tribal Heritage of India : Ethnicity, Identity and Interaction*. Vikas Publishing House, Delhi.

Dubey, S. N. and Ratna Murdia (ed) (1977) *Land Alienation and Restriction in Tribal Communities in India*. Himalaya Publishing House, Bombay.

Dumont, Louis (1970) *Homo Hierarchicus : The Caste System and Its Implications*. Chicago

- University, Chicago. Original Work (French) in 1966.
- Dumont, Louis and Pocock, David F. (1959) 'Pure and Impure', *Contributions to Indian Socio-logy*, 3:9-39.
- Elwin, Verrier(1943) *The Aborigines*. Oxford University Press, Bombay.
- Elwin, Verrier(1977) 'Issues in Tribal Policy Making', original published in 1960. Romesh Thaper (ed) *Tribe, Caste and Religion in India*. 29-37. Macmillan, Delhi.
- van Exem, Albert (1978) 'The Crisis and the Sarna', *Sevartham* 3:27-45. St. Albert College, Ranchi.
- van Exem, Albert (1982) *The Religious System of the Munda Tribe : An Essay in Religious Anthropology*. Haus Voelker und Kulturen, St. Augustin.
- Fuchs, Stephen (1965) *Rebellious Prophets : A Study of Messianic Movements in Indian Religions*. Asia Publishing Huse, Bombay.
- 藤井 毅 (1987)「南アジア研究書誌(1) エルウィン著作目録」、**南アジア言語文化**1: 1-59。
- 藤井 毅 (1988)「インド国制史における集団: その概念規定と包括範囲」、佐藤 宏編。**南アジア現代史と国民統合**。23-103。アジア経済研究所。
- Gautam, M. K. (1977) *In Search of an Identity : A Case of the Santal of Northern India*. Leiden.
- Ghurye, G. S. (1959) *The Scheduled Tribes. 2nd Edition*. Popular Prakashan, Bombay.
- グリースン、H. A. 竹林滋・横山一郎訳 (1970) **記述言語学**。大修館書店。
- 合田 濤編 (1989) **現代社会人類学**。弘文堂。
- ゴドリエ、山内訳 (1976) **人類学の地平と針路**。紀伊國屋書店。
- 原口武彦 (1975) **部族: その意味とコート・ジボワールの現実**。アジア経済研究所。
- 服部四郎 (1956) **基礎語彙調査票**。東京大学言語学教室。
- 服部四郎 (1960) **言語学の方法**。岩波書店。
- Hoffmann, John B. (1903) *Mundari Grammar*. Calcutta.
- Hoffmann, John B. (1930-78) *Encyclopaedia Mundarica. Vols 1-16*. Reprinted in 1990. Gian Publishing House, Delhi.
- Hutton (1933) *Census of India 1931*. Delhi.
- 石毛直道 (1985)「東アジアの食事文化研究の視野」、**石毛編** 19-69。
- 石毛直道編 (1985) **論集東アジアの食事文化**。平凡社。
- 石川栄吉・梅悼忠夫・大林太良・蒲生正男・佐々木高明・祖父江孝男編 (1987) **文化人類学事典**。弘文堂。
- Jay, Edward (1961) 'Rivitalization Movements in Tribal India', L. P. Vidyarthi (ed) *Aspects of Religions in Indian Society*. Meerut.
- Jenner, P. N., L. C. Thompson and S. Starosta (eds) (1976) *Austroasiatic Studies. Part 1 and 2*. University of Hawaii Press.

Jha, Jagdish Chandra (1964) *The Kol Insurrection of Chota-Nagpur*. Thacker & Spink, Calcutta.

Kalia, S. L. (1959) 'Sankritization and Tribalization', *Bulletin of the Tribal Research Institute* 33-43. Chindwara.

川田順造・福井勝義編 (1988) **民族とは何か**。岩波書店。

Kessel, Marianne (1975) *Ein Beitrag zur Kenntnis der Munda-Religion*. Berlin.

小林 勝 (1992) 「ケーララ社会とブラーフマン —統一王権の不在状況下におけるカースト制について—」、*民族学研究*56-4 : 407-425。

小西正捷 (1986) **ベンガル歴史風土記**。法政大学出版局。

小谷汪之 (1986) **大地の子：インドの近代における抵抗と背理**。東京大学出版会。

甲田和衛 (1978) 「カースト論」、加藤泰安、梅棹忠夫、中尾佐助編、**社会文化人類学**。中央公論社。7-21。

Krishnamurti, Bh. (ed) (1986) *South Asian Languages : Structure, Convergence and Diglossia*. Motilal Banarsidass, Delhi.

Kulke, Hermann (1975) 'Kshatriyaization and Social Change : A Study in Orissa Setting', S. Pillai(ed) *Aspects of Changing India : Studies in Honour of Prof. G. S. Ghurye*. 398-409. Popular, Bombay.

Lakshmi Bai, B. (1986) 'A Note on Syntactic Convergence among the Indian Languages : The Verb "to be"', *Bh. Krishnamurti(ed)* 195-208.

Lucas, Jack A. (1985) 'The Word "Tribe" in Chotanagpur' *South Asian Anthropologist* 6-2 : 91-98.

MacDougall, John (1985) *Land or Religion ? : The Sardar and Kherwar Movements in Bihar 1858-95*. Manohar, Delhi.

Marriott, McKim (1955) 'Little Communitities in an Indigenous Civilization' *Marriott (ed)* 171-222.

Marriott, McKim (ed) (1955) *Village India : Studies in the Little Community*. University of Chicago Press, Chicago.

Masica Colin (1978) 'Aryan and Non-Aryan Elements in North Indian Agriculture', M. M. Deshpande and H. E. Hook (eds) *Aryan and Non-Aryan in India*. 55-151. University of Michigan Press.

松井 健 (1983) **自然認識の人類学**。どうぶつ社。

峰岸真琴 (1991) 「語彙調査票の再構成について」、**辞典編纂**。3 : 11-58。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

Misra, P. K. (1977) 'Tribe-Caste : A Nonissue', *Journal of the Indian Anthropological Society* 12-2 : 137-150.

Moser, R. and M. K. Gautam (eds) (1978) *Aspects of Tribal Life in South Asia, 1 : Strategy and*

Survival. Studia Ethnologica, Berne.

Moser-Schmitt, E. (1978) 'Mechanisms of Detribalization: A Case Study of Bihar with Special Reference to the Dhanbad District (1)', *Moser & Gautam (eds)*. 67-82.

Munda, R. D. (1986) 'Elements of Tribal Identity, Crisis and Planning for a Way Out', S. A. B. D. Hans (ed) *Tribal Culture and Identity in Chotanagpur: Challenge before Higher Education*. 35-41. All India Association for Christian Higher Education, Ranchi.

Munda, R. D. (1988) 'The Jharkhand Movement: Retrospect and Prospect', *Social Change* 18-2: 28-58.

Munda, R. D. (1989) 'The Bases of Cultural Identity of Chotanagpur', *Religion and Society* 36-2: 24-29.

Munda, R. D. and H. Lutz (1980) 'Tribal Change and Development in India', P. Dash Sharma (ed) *The Passing Scene in Chotanagpur: Sarat Chandra Roy Commemoration Volume*. 82-122. Maitryee Publications, Ranchi.

Narayan, S. (ed) (1992) *Jharkhand Movement: Origin and Evolution*. Inter-India Publications, Delhi.

名和克郎 (1992) 「民族論の発展のために: 民族の記述と分析に関する理論的考察」、**民族学研究** 57-3: 297-315。

岡 正雄・江上波夫・井上幸治編 (1991) **民族とは何か**。山川出版社。

Orans, Martin. (1965) *The Santal: A Tribe in Search of a Great Tradition*. Wayne State University Press, Detroit.

長田俊樹 (1990) 「インド東部のチョターナーグプル地方における言語輻合について」、**内陸アジア言語の研究** 6: 143-177。

長田俊樹 (1992 a) 「ムンダ人の人名について」、**アジア・アフリカ言語文化研究所通信** 74: 29-32。

長田俊樹 (1992 b) 「ムンダ人の挨拶考」、**アジア・アフリカ言語文化研究所通信** 76: 1-4 + 33。

長田俊樹 (1992 c) 「書評 Encyclopaedia Mundarica」、**アジア・アフリカ言語文化研究** 44: 223-241。

長田俊樹 (1993 a) 「ムンダ人の音楽と舞踊について」、**アジア・アフリカ言語文化研究所通信** 78: 1-5 + 10。

長田俊樹 (1993 b) 「ムンダ人」、信濃毎日新聞社編、**世界の民・光と影**。278-287。明石書店。

Osada Toshiki (1992) *A Reference Grammar of Mundari*. Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo.

押川文子 (1981) 「独立後インドの指定カースト・指定部族政策の展開」、**アジア経済** 22-1: 26-45。

押川文子 (1982) 「指定カーストと指定部族」、山口博一編。**現代インド政治経済論**。93-116。アジア経済研究所。

Parkin, Robert (1985) 'Munda Kinship Terminologies', *Man* 20-4: 705-721.

- Parkin, Robert (1986) 'Comparative Munda Kinship: A Preliminary Report', *Oxford Studies on India* 1-1 : 59-74.
- Parkin, Robert (1988) 'Marriage, Behaviour and Generation among the Munda of Eastern India', *Zeitschrift für Ethnologie* 113-1 : 67-85.
- Parkin, Robert (1992) *The Munda of Central India : An Account of their Social Organization*. Oxford University Press, Delhi.
- Rao, M. S. A. (1979) *Social Movements in India*. 2 Vols. Manohar, Delhi.
- Redfield, Robert (1956) *Peasant Society and Culture*. University of Chicago Press, Chicago.
- Risley, H. H. (1908) *The People of India*. Calcutta.
- Rosser, Colin (1966) 'Social Mobility in the Newar Caste System', C. F. Haimendorf (ed.) *Caste and Kin in Nepal, India and Ceylon : Anthropological Studies in Hindu-Buddhist Contact Zones*. Asia Publishing House, Bombay.
- Roy, Sarat Chandra (1912) *The Mundas and their Country*. Reprinted in 1970. Asia Publishing House, Bombay.
- Sachchidananda (1978) 'The Bhagat Movements in Chotanagpur', S. C. Malik (ed) *Indian Movements : Some Aspects of Dissent Protest and Reform*. Indian Institute of Advanced Study, Shimla.
- Sahay, K. N. (1962) 'Trends of Sanskritization among Oraons', *Bulletin of the Bihar Tribal Institute* 4-2 : 1-15.
- Sahay, K. N. (1967) 'A Study in the Process of Transformation from Tribe to Caste : Parahiya of Lolki, A Case Study', *Journal of Social Research* 10-1 : 64-89.
- 斎藤昭俊 (1984) **インドの民族宗教**. 吉川弘文館。
- 斎藤昭俊 (1989) 「インド部族のまつり(1)―序説―」 **大正大学研究紀要** 74 : 87-107。
- 斎藤昭俊 (1991) 「インド部族のまつり(2)―祭儀の構造―」 **大正大学研究紀要** 76 : 49-86。
- シュミット、コッパース。大野俊一訳。(1970) **民族と文化**。上、下巻。河出書房新社。
- Sengupta, Nirmal(ed) (1982) *Fourth World Dynamics : Jharkhand*. Author Guild, Delhi.
- Shanin, Teodor(ed) (1971) *Peasants and Peasant Societies*. Penguin.
- Sharma, K. L. (1976) 'Jharkhand Movement in Bihar', *Economic & Political Weekly* 11-1,2 : 37-43.
- 柴田 武 (1980) 「解説」、柳田國男著、**蝸牛考**。新潮文庫。
- Singer, Milton (1972) *When a Great Tradition Modernizes : An Anthropological Approach to Indian Civilization*. Preager Publisher, New York.
- Singer, Milton (ed) (1959) *Traditional India : Structure and Change*. American Folklore Society, Philadelphia.
- Singh, K. Suresh (1966) *Dust-Storm & Hanging Mist : Story of Birsa Munda and His Movement*. Firma KLM, Calcutta.

- Singh, K. Suresh (1978) 'The Munda Land System', P. Ponette(ed) *The Munda World : Hoffmann Commemoration Volume*. 29-35. Catholic Press, Ranchi.
- Singh, K. Suresh (1983) *Birsa Munda and his Movement 1874-1901 : a Study of a Millenarian Movement in Chotanagpur*. Oxford University Press, Delhi.
- Singh, K. Suresh (1985) *Tribal Society in India*. Manohar, Delhi.
- Singh, K. Suresh (1988) 'Tribal Peasantry, Millenarianism, Anarchism and Nationalism : A Case Study of the Tanabhagats in Chotanagpur, 1914-25', *Social Scientist* 186 : 36-50.
- Singh, K. Suresh(ed) (1972) *Tribal Situation in India*. Indian Institute of Advanced Study, Simla.
- Singh, K. Suresh(ed) (1982) *Tribal Movements in India. 2 Vols*. Manohar, Delhi.
- Sinha, N. K. (1974) *Mundari Phonetic Reader*. Central Institute of Indian Languages, Mysore.
- Sinha, H. K. (1975) *Mundari Grammar*. Central Institute of Indian Languages, Mysore.
- Sinha, Surajit (1959) 'Tribal Cultures of Peninsular India as a Dimention of the Little Tradition : A Preliminary Statement', *Singer (ed)* 298-312.
- Shinha, Surajit (1962) 'State Formation and Rajput Myth in Tribal Central India', *Man in India* 42-1 : 35-80.
- Shinha, Surajit (1965). 'Tribe-Caste and Tribe-Peasant Continua in Central India', *Man in India* 45-1 : 57-83.
- Sinha, S. J. Sen and Panchbai (1969) 'The Concept of Diku among the Tribes of Chotanagpur', *Man in India* 49-2 : 121-138.
- Sinha, S. P. (1968) *The Problems of Land Alienation of the Tribals in and around Ranchi (1955-1965)*. Bihar Tribal Research Institute, Ranchi.
- Srinivas, M. N. (1952) *Religion and Society among the Coorgs of South India*. Oxford.
- Srinivas, M. N. (1956) 'Sanskritization and Westernization', Aiyappan and Ratnam. (eds) *Society in India*. SSA Publication, Madras.
- Srinivas, M. N. (1962) *Caste in Modern India and Other Essays*. Asia Publishing House, Bombay.
- Srinivas, M. N. (1966) *Social Change in Modern India*. University of California Press, Barkeley.
- Srivastava, A. R. N. (1986) *Tribal Freedom Fighter of India*. Publication Division, Government of India, New Delhi.
- Srivastava, S. K. (1963) 'The Process of Desanskritization in Village India', B.Ratnam (ed) *Anthropology on the March*. 263-267. SSA Publication, Madras.
- Staal, J. F. (1963) 'Sanskrit and Sanskritization', *Journal of Asian Studies* 22 : 261-275.
- Standing, Hilary (1976) *Munda Religion and Social Structure*. School of Oriental and African Studies, Ph. D. Thesis. London.

Standing, Hilary (1981) 'Envy and Equality : Some Aspects of Munda Values', A. C. Mayer(ed) *Culture and Morality : Essays in honour of Christoph von Furer-Haimendorf*. 220-238. Oxford University Press, Delhi.

杉山晃一 (1971)「伝統的水田耕作民の社会組織と土地所有 ―中部インドのムンダ族の現地研究 (上)―」、**東北大学日本文化研究所報告** 5, 6 : 29-91。

杉山晃一 (1972)「同 (下)」**東北大学日本文化研究所報告** 7, 8 : 73-148。

Sugiyama Koichi (1969) *A Study of the Mundas Village Life in India*. Tokai University Press, Tokyo.

田辺明生 (1990)「王権とカースト ―バラモン王・支配カースト関係小考―」、**民族研究**55-2 : 125-143。

田中克彦 (1983) **チョムスキー**。岩波書店。

田中雅一 (1986)「礼拝・アビシャーカ・供儀 ―浄・不浄から力へ；スリランカのヒンドゥー寺院儀礼―」、**民族学研究**51-1 : 1-31。

田中雅一 (1989)「クリシュナーからクリシュナへ：スリランカ・タミル漁村における女神崇拝の『サンスクリット化』をめぐる」、**南アジア研究** 1 : 96-114。

内堀基光 (1989)「民族論メモランダム」、田辺繁治編。**人類学的認識の冒険：イデオロギーとプラクティス**。27-43。同文館。

Verma, K. K. and Ramesh Sinha (1980) 'Socio-Political Movements among the Munda and the Oraon', Bhupinder Singh and J. S. Bhandari (eds) *The Tribal World and its Transformation*. 1-15. Concept, Delhi.

ワースレイ、P.吉田正紀訳 (1981) **千年王国と未開社会：メラネシアのカーゴ・カルト運動**。紀伊國屋書店。

八木祐子 (1991)「儀礼・職能カースト・女性 ―北インド農村における通過儀礼と吉・凶の観念―」、**民族学研究**56-2 : 181-208。

柳田國男 (1930) **蝸牛考**。新潮文庫版。1980年。

柳田國男 (1935) **郷土生活の研究**。筑摩叢書版。1967年。

柳田國男監修 (1955-56) **綜合日本民俗語彙**。全5巻。平凡社。

山田隆治 (1956)「ムンダ族の親族組織」、**民族学研究**20-3, 4 : 209-212。

山田隆治 (1958)「ムンダ族のへそのお伝説」、**社会人類学** 4 : 44-55。

山田隆治 (1959)「中・東部インド未開諸族における死後の生活観」、**民族学研究**22-3, 4 : 19-47。

山田隆治 (1962)「象徴的結婚：中部インド Munda 諸族の豊穡儀礼」、**民族学研究**26-2 : 1-26。

山田隆治 (1969) **ムンダ族の農耕文化複合**。風間書房。

山田隆治 (1988)「イデオロギーとしてのカースト制度 ―部族社会の分析から―」、白鳥芳郎・杉本良雄編。**伝統宗教と社会・政治的統合**。19-48。南山大学人類学研究所。

Ymada Ryuji (1970) *Cultural Formation of the Mundas*. Tokai University Press, Tokyo.

山折哲雄 (1992) **聖と俗のインド**。有学書林。

吉田集而 (1985) 「東アジアの酒のスターターの分類とその発展」、**石毛編** 73-116。

Zide, Norman H. and Arelene R. K. Zide (1973) 'Semantic Reconstructions in Proto-Munda Cultural Vocabulary', *Indian Linguistics* 34-1 : 1-24.

Zide, Norman H. and Arelene R. K. Zide (1976) 'Proto-Munda Cultural Vocabulary : Evidence for Early Agriculture', *P. N. Jenner, L. C. Thompson and S. Starosta (ed)* 1295-1334.